特定非営利活動法人　日本免疫学会

2025 年度　前期　Tadamitsu Kishimoto International Travel Award

研究発表報告書

申請者氏名	鈴木　功一郎	**会員番号**	0037833	
申請者の所属・職名	慶應義塾大学 薬学部 生化学講座 ・ 助教			
出席会議名	International Symposium on Perinatal and Early Life Immunity			
発表論文タイトル	Maternal gut microbiota induces γδT cells at the maternal-fetal interface to prevent pathogen-associated intrapartum complications			

実施結果:

この度は 2025 年度前期 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award に選出いただき、誠にありがとうございました。

本 Travel Award のご支援のもと、私は 2025 年 4 月 9 日から 4 日間、ドイツのフライブルクにて開催された国際シンポジウム「International Symposium on Perinatal and Early Life Immunity」に参加いたしました。本シンポジウムは妊娠期や出生後早期における免疫系をテーマとしており、early life における種々の免疫細胞の発達、それらを制御する腸内細菌をはじめとする環境因子、この時期に起きる免疫系へのインプリンティングが将来の疾患発症に与える影響などについて最新の知見が交わされました。日本からの参加は私たちのグループのみでした。

私は、本シンポジウム 1 つ目のセッションである「Immunity at the materno-fetal interface」にて口頭発表の機会をいただき、母子境界面に存在する γδT 細胞が、母体の大腸に存在する特定の細菌群により誘導され、妊娠中の感染によって引き起こされる分娩異常を制御する、という知見を報告しました。本シンポジウムでは口頭発表の会場は 1 つだけで、全ての参加者に自分の発表を聴いていただけるという喜びがある一方、私にとって初めての国際学会でもあったことから、これまでにないほどの緊張を覚えました。しかし、質疑では時間いっぱいまで質問をいただき、発表後の休憩時間に質問に来てくださる先生方もいらっしゃって、とても有意義なディスカッションを行うことができました。

本シンポジウムは「early life immunity」という限られた領域に特化したシンポジウムであったからこそ、どの発表も興味を引くものばかりであり、多くの近い研究領域の研究者と議論を交わせたことは自身の研究にも有益であったと感じています。特に、特定の現象の early life における重要性を如何に証明するか、という点についての実験のデザインは大いに参考になりました。

また、母子境界面免疫の分野で著名な Nardhy Gomez-Lopez 先生に休憩時間を利用してディスカッションをお願いし、口頭発表の時間内にはご紹介できなかった最新のデータも共有させていただいたところ、私の研究の今後の進め方について非常に有益なご助言を頂戴することができました。このことも、今回の渡航で得られた大きな収穫でした。

末筆ではございますが、岸本忠三先生をはじめ、選考に携わられた日本免疫学会の先生方、推薦を賜りました長谷耕二教授、さらには日頃より研究の遂行においてご指導・ご協力をいただいている共同研究者の皆様に、心より御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

注）本参加記は手書きでなく、Word を使用して作成してください。